

### 第3回館長講座 『縄文時代の研究史 明治時代以前と大森貝塚』

司会：今日は、第3回目の館長講座『縄文時代の研究史』ということで、明治時代以前の研究、それと大森貝塚についてお話ししていただきます。鷹野館長、よろしくお願いいたします。

館長：みなさん、こんにちは。今日で3回目になります。来月からは、隔週ということで、かなり厳しいですけども、頑張っていきたいと思います。

それでは、これから縄文時代の研究というのが、どのように進められてきたのかということ振り返って参ります。大体、9回目か10回目の講座まで、そのような話をしていこうかと思っています。

まず、明治時代以前について、「研究前史」と書きましたが、遺跡がいろいろな形で人々の目に触れて、いろいろな解釈がされていたことが記録に見られます。

一番古いものとしていいと思いますが、和銅6(713)年に諸国で風土記を作れという命令が下されました。

それを受けて、養老7(723)年頃には、既にできていたと考えられる「常陸国風土記」中に現在も残っている茨城県水戸市の<sup>おおくし</sup>大串貝塚の記録が見えます。

外国の文献は承知しておりませんが、もしかしたら貝塚に関する世界最古の記録と言えるのかもしれない。

どんなことが書かれているかと言いますと、ここに「平津驛家西一二里有岡，名曰大櫛，上古有人，體極長大身居丘壘之上，採蜃食之，其所食貝積聚成岡。」(「平津驛家の西，一二里に岡有り。名を大櫛と曰う。上古人有り。體は極めて長大にして，身は丘壘の上に居る。蜃を採りて之を食す。其の食する所の貝が，積聚して岡と成る。」)とあります。

簡単に言いますと、丘の上に巨人がいる。その巨人が海岸で、蜃はハマグリのことですけども、ハマグリを取って食べる。その貝を捨てたところがこの貝塚であると、そういう巨人伝説に結び付けられているわけです。

おそらく貝塚が海から離れたところにあるので、こういう伝説につながったのだらうと思います。現在も、大串貝塚は残っておりまして、後で紹介いたしますが「大串貝塚ふれあい公園」という公園の中に保存されておりまして。

縄文時代の前期前半の<sup>はなづみかそうしき</sup>花積下層式と<sup>せきやま</sup>関山式と書きましたが、どちらも土器の形式名です。これについては、いずれゆっくりお話していきます。

台地上に残っていたはずの貝塚は残っておらず、<sup>いんめつ</sup>埋滅しているんですが、台地の斜面に貝層が残っておりまして、その斜面の貝塚が昭和45年に国の史跡に指定されています。

また、昭和11年と昭和18年に発掘調査が行われていまして、その結果、シジミを主体とする貝塚であるということが分かっています。先程のハマグリとはちょっと違うんですけども、これは貝のことを指すと言うことでもいいのかなと思います。

写真に木の影が写ってしまっていますが、「大串貝塚ふれあい公園」の案内図です。ここの史跡に指

定されている部分の斜面に貝層が残っています。それから、このオレンジのところは貝層の断面を観察できるという施設です。

また、ここに巨人ですね、ダイダラボッチとかデイダラボッチとか、いろんな言い方がありますがけれども、大きなダイダラボッチ像があります。

そして、ここはダイダラボッチの足跡を模したという池がありまして、ここは縄文広場という名前の縄文時代の復元住居を含む広場となっており、この道に沿った建物が「縄文くらしの四季館」という名前の建物として、この中に展示施設や、それからモール、物販施設もあります。

ダイダラボッチは、ものすごく大きくて、この建物の中に入れて、確か手のところで外に出られたと思いますが、非常に眺めが良いです。ダイダラボッチの建物の中には、ダイダラボッチの伝説が残っている各地の地図もあります。

そして、これが「縄文くらしの四季館」という建物ですが、わざと両端がこんなふうに壊れているようになっていまして、もしかしたら、この間のすごい地震で壊れたのかなというような想像をさせたいのでしょう、最初からこういうふうに造られていました。と言いますのは、貝塚というのは廃墟というイメージがあり、そのイメージから、この建物そのものを造るときに、こういうふうにしたそうです。ちょっとやり過ぎかなとも思いますが… (笑)。

残念ながら、中の展示施設は写真撮影禁止となっており、紹介できません。

これが貝層断面を観察できる施設ですけれども、壁の状態は正確に言うと本当の断面ではなく、土層のはぎ取りしたものを展示してあります。

現在は、鍵がかけられてあって、中に入れず、見られません。

10 何年前に行ったときには、中がまだ開放されており、その時の写真です。幸い中身が変わっていることはなく、そのままという感じでした。

これは「足跡池」という池です。足跡、足の形に近い池がありました。

このダイダラボッチなのですが、遺跡と言うか貝塚が巨人伝説と結び付けられて考えられている所は、他にもありまして、福島県相馬郡の新地町しんちまちにある新地貝塚にも巨人伝説があります。

江戸時代の儒学者の佐久間義和が、仙台藩の第 4 代藩主の伊達綱村の命を受けて享保 4 年に著した『奥羽観蹟聞老志』おくうかんせきもんろうしという仙台藩の地誌の中に新地貝塚のことが出ていまして、宮城県との県境にある鹿狼山かろうざんという山に住んでいた巨人の手長明神てながみょうじんが手を伸ばして海から貝を捕って食べ、その殻を捨てた所が新地貝塚である、ということを書いています。鹿狼山から海岸までは大体 5km くらいあり、新地貝塚から海岸までは大体 2km というところですが、5km も手を伸ばして、途中 2km のところに殻を捨てたということですから、すごいことです。

この貝塚のことは、2004 年に当館の特別展で『東北発掘ものがたり 2』がありましたが、その時にも紹介されていまして、ここに大正 13 年の発掘調査と書きましたけれども、その前の明治 23 (1890) 年に若林勝邦かつくにという人が、この貝塚を掘って、そのことを『東京人類学会雑誌』の 57 号に紹介してい



ます。大正 13 年の発掘調査の時には、出土した土器に、その遺跡の名前を取って新地式という土器の形式が設定されました。縄紋時代の後期後半くらいの形式の土器です。

そして、これも戦前ですが、昭和 5 年には、新地貝塚は手長明神跡と併せて国指定史跡になっております。

こういう遺跡についての記録の他に、遺物については、特に石鏃<sup>せきぞく</sup>は早くから人々の目に触れていたようで、遺物が認識されていたという記録が残っています。

『続日本後紀』の巻八に、承和 6 (839) 年 8 月 29 日、出羽国田川郡西浜の海岸一帯に長雨が続いた。出羽国田川郡西浜は、今の山形県の一番北の端の秋田県境に近い所ですが、長雨が続き、雨だけではなく雷鳴が甚だしく、10 日あまり降ってやっと雨が止んで晴天になったのですが、そのとき、浜に多くの鏃<sup>ぞく</sup>に似た石が見つかったというのです。

要するに、矢ジリ、現在でいうところの石鏃が多く見つかり、古老に尋ねた、こういったものは初めて見たということなので、これを朝廷に献じたところ、朝廷ではそのことが異変の兆候だったりすると困るということで、神仏に祈るように命じたと、いう記録がこの『続日本後紀』に残っています。

山形県の飽海郡遊佐町吹浦海岸<sup>あくみぐんゆさまちふくら</sup>という所に該当すると言われているんですが、この遊佐町という所には、「神矢田<sup>かみやだ</sup>」という地名があります。神様の「神」に、「矢」に「田んぼ」ですが、ここは遺跡で、石鏃がたくさん出てきます。神の矢ということの連想です。

それから、三代実録は、清和天皇・陽成天皇・光孝天皇の三代の記録ですが、ここにも、元慶 8 (884) 年に秋田城内に雷雨があり、その雷雨の後、石鏃が見つっていますが、その雷雨によって石鏃が降ってきたと解釈された記録があります。

こういうのは、一般に「矢の根石」、矢ジリだと想像はされていたんですけども、人間が作ったものという考えには至っていなかったようで、天上の世界で戦った神様の軍勢の射た矢の矢ジリが、地上に落下したものだ、そういう考えに結び付けられていたようです。

つまり、雷鳴が轟くような激しい雨の後、落ちていたものですから、雷というのは、天上の世界でも戦いの様子というように見なされていました。

面白いことに、雷と石器時代の遺物とを結びつけるというのは、日本だけのことではなかったんです。ヨーロッパでも、石斧<sup>せきふ</sup>は、雷雨の時に、稲妻が閃めいて、その時に空中から落下して来るものと考えられていましたし、アフリカでは、下界に住む悪人を罰するために、天の神様が降らしたのではないかと、そんな伝説・伝承も残っています。

日本でも石匕<sup>せきひ</sup>、後で出てくる石器の名前ですけれども、石匕を天狗の飯匙<sup>めしがい</sup>と呼んだり、石斧を雷斧<sup>せきふらいふ</sup>、それから石棒については雷の撥<sup>ぼち</sup>、そんな呼び方をしています。

経験的に、遺跡を歩いて遺物の表面採集をやりますと、激しい雨の後のほうが遺物が拾えたという経験があります。激しい雨で表面の土が流されて遺物が地表に出やすいということだろうと解釈できます。

こういう人工のものではないという考え方に対して、江戸時代半ばになって、ようやく神軍の使用したものという考え方から脱却する傾向がみられてきます。



肥後の国、今の熊本県の江戸時代前半の神道家で国学者の井沢長秀という人の書いた『広益俗説弁』という随筆がありますが、これは非常に広く読まれたものだそうで、後の読本の素材源にもなっているというようなものです。この中に石鏃というのは、天然自然のもので、砂の中にある石が大雨の時に流されてできたものだという説明をしています。

江戸時代中期の本草学者の松岡玄達は、石鏃は蝦夷の使っていたもので、それが本州の各地で見られるというのは蝦夷が雁の狩りをしていて、その時に鳥に刺さったものが飛んできて落ちたのだろうと、羽に付いていたものが落下したと、このような気宇壮大というか面白い想像をしておりました。

新井白石は、また違う解釈をしており、享保10年に亡くなりますが、その年に仙台藩の絵師の佐久間洞巖から石鏃を3枚もらい、それについてのお礼状を書いています。

そのまま載せましたけれども、「石鏃三ツ、さてさて珍しく忝奉存候。…(中略)…此物俗間に申す神軍の矢の根にて候。」ここまでは神軍の矢としていますが、「きわめてふるきものに候。すなわち書経に候。祭、孔子家語、国語などに候石弩にて、肅慎国のものに候。すでに国史にも肅慎国のもの、佐渡に入犯し候ことも候。蝦夷地入犯のことも候。」ここまできると、先程、神軍の矢の根と言っていました、そうではなくて、これは肅慎国のものだと言っています。

肅慎国とは「みしはせ」とも言いますが、古代中国の東北方面に居住したとされる民族のことで、大体、旧満州、それから沿海州、あの辺にいたと考えられています。

その肅慎国、「みしはせ」の者たちが佐渡にやって来ているんです。このことは日本書記にありまして、欽明天皇の時に、欽明天皇は継体天皇の皇子で、推古天皇のお父さんにあたる方ですが、そのころに肅慎国のものが佐渡に入ったとしています。それから、斉明天皇の時、ちょうど大化の改新の頃に、安倍比羅夫が肅清の討伐をしているという記録があります。蝦夷地のこともそうです。「太古の時に彼国のもの入犯し候はいふに及ばず、東奥、常陸または越後等の地に蟠抛し候て、度々の軍も候こと俗に神軍とは申し伝たるに候。其軍有之候時に勝ち得候てかの軍杖を掘り埋め、または塚などにし候が、急雷雨の時たたき出され候を、国史には降り候と心得て記し置かれしと見候。」とあり、「候」ばかりですけど、要するに侵入して来て戦ったときに、彼らの軍杖と言うか、軍器を埋めたり、または塚などにしたものが、雨の時に現れてきたのだという解釈です。

ですから、人工のものということを確認に言ったものであり、人工説は広まったんですけれども、まだまだ定説となるわけではなくて、神軍天降説というのでしょうか、神の軍勢の物が落ちてきたようだとそういう説が存続していたようです。

そうした中で、江戸時代の研究というと、忘れてはならないのが、木内石亭という人です。江戸時代中期の人ですけども、近江国栗太郡田村、現在の草津市北山田というところの人で、庄屋さんで石の長者として全国に知られていた人です。家業を継ぐ立場でしたが、早々に引退して自分の好きなことで生活して生きて人です。後に書かれたものには「予 十一歳にして初めて奇石を愛し」というようなことを書き残してしまっていて、小さい時から石に興味を抱いていました。

石と言っても、形の変った石で、彼の愛した奇石というのは、自然の石もありましたし、人工のものもありました。後に「奇石会」という同好会を作り、同志を集めて諸国を旅しながら、同好の士と情報を交換したり、あるいは、物と物を交換したりして、各地の奇石を集めて調べたりしました。



どうしても欲しいものがあると、手紙を送って「下さい」とせがんだり、お金で解決ができるものなら、そうすることもあったようですし、さっき言ったように物と物を交換するというのもしていたようです。

彼の集めたものの中には、石器とか石製品というような考古学上の遺物とされるようなものとか、それから水晶などの鉱石があったり、さまざまな種類の石の収集に努めており、生涯に集めた石の数は2000点から3000点に及ぶとされています。自分の集めたものの記録を書物にして、『雲根志』『曲玉問答』『鍬石伝記』『神代石之図』などを残しております。

その中でも有名なのは『雲根志』で、約2000点の石を分類して記載しています。これは『雲根志』の中に書かれている名称ですが、石鍬、曲玉、先程出てきた天狗飯匙、神代石、車輪石、鍬形石、石刀といった名称で石器や石製品が記されています。

神代石とは、石器・石製品を一括りにした言葉で、独鈷石とか、鍬形石、琴柱形石製品、石剣、石棒、このようなものを総称したものです。神代石という名称から分かるとおり、先程の神軍天降説に近い考え方で付けられたものです。石鍬については、出土地名表も一緒に付けられており、どこでそれが出土したのかということが書かれていたり、形による分類もされていました。

それから、石を単なる愛玩物、つまり石が好きだから集めて、愛でているだけというのではなくて、石はそれを通じて古を明らかにするという材料になるんだと、そういう姿勢も見られますし、『鍬石伝記』の中では、石鍬は人工のものであるということを明確にしています。

その他、石器について「欠き肌」とか「磨き肌」という表現で、打製石器と磨製石器の区別、叩いて作る「欠き肌」、磨いて作る「磨き肌」という区別をしております。科学的な姿勢を示したということだと思います。集めた石については、江戸時代の物産会とか薬品会といった後世の博覧会に相当する場に出品されて、石亭の名は全国に知られるようになっていきましたが、残念ながら石亭が集めた多くの石は散逸しており、そのコレクションの全容を我々が知ることは難しいという状況です。

実際にどういうものかご存知の方も多いと思うんですけど、左側の5個が石斧で、石亭風に言うとこれは「磨き肌」の石斧です。石斧という名前の石であります。石の斧だというふうに、すぐに結び付けなくてください、あくまでも石の斧の形をした石器です。

それから右の上のほうのものが石鍬ですが、中子のある石鍬と無いものと両方あります。それからこれが石匙、石七ですが、また後で出て来ます。これは縦型の石七というような言い方もされます。

勾玉ですが、左上は縄紋時代の勾玉で、左下は弥生時代に見られる勾玉、そして右側は古墳時代に見られる勾玉です。普通、勾玉は古墳時代のものがよく知られていると思いますが、縄紋時代にもこういうものがありました。勾玉の起こりというのは、もともとは歯牙垂飾、「歯」と「牙」を材料とした垂飾と言われており、獣の牙に穴をあけてペンダントのようにして使っていたことが始まりだとされています。この縄紋時代の勾玉をみますと牙の格好だなと見えますが。こうなってくると洗練されていまして、もともとの牙というか、獣の牙を連想する形にはなっていないかもしれません。

それから天狗飯匙です。石七とか石匙と言いますが、形は先程の縦型のもの、それに対して、横型



のものもあります。共通するところは何かと言うと、ここのところに、ちょっとしたつまみがあることで、つまみに対して直行する方向に一種の刃があるというタイプが縦型です。つまみと同じ方向に刃があり、ナイフのようにして使ったと言われていました。

これは想像になりますが、つまみのところに縄なりなんなりを使って腰にぶら下げて携帯して使ったのではないかということを使う人もいます。縄紋時代に普通に見られる石器であり、万能のナイフという言い方もされます。

石亭の言う車輪石・<sup>しゃりんせき</sup>鋳形石・<sup>くわがたいし</sup>石釧ですが、これは古墳時代の遺物です。古墳時代の装飾品で、腕輪などのアクセサリです。もともとは貝殻の形です。これは車輪石ですけれども、これは貝殻を二枚貝の上のほうを切ると、こんな形になります。

これは鋳形石ですけれども、これも貝殻の形です。ゴホウラという大きな巻貝を縦に切った形を模したもので、装身具、古墳からの副葬品として出土するものが多いようです。これが石釧ですけれども、これも装身具です。

それから石刀・石剣です。石棒のあまりよい写真がなかったので、これだけにしました。石刀とか石剣とか書いてありますけど、刀でも剣でもなく、その形をしたものです。

こっちの石刀は、縄紋時代の晩期に出てくるのですが、中国大陸の青銅製の刀子の形をまねたとする解釈もあります。だとすると縄紋時代の晩期に大陸との行き来があったということが言えるのかもしれない。いくつか証拠があるので、まず恒常的な行き来とはいかないまでも連絡があったことはおそらく間違いありません。

こっちの石剣ですが、ここの部分は非常に薄く、扁平であり、剣になっています。これは山梨県の<sup>きんせい</sup>金生遺跡というところから出土したものだったと思います。金生遺跡のものを実際に見せてもらったことがあり、それだけでなく触らせてもらったことがあります。よく見るとここの部分が他と違って黒ずんでいました。なぜそうなっているんだろうと想像すると、持っていた部分なのかもしれません。その部分に、手垢という言葉い過ぎかもしれませんが、それが跡になって残っているということを想像させるような残り具合でした。だとすると、一種の権威のシンボルだということがいえそうです。

それから訳の分からない石器がたくさん出てきていますが、横に並んでいる上の二つのものは、<sup>ごもつ</sup>御物石器と言います。この名前は木内石亭の時代にはありませんでした。非常に大きくて30cmくらいにもなる大型の磨製石器です。この<sup>ごもつ</sup>御物の名前ですが、「皇室の御物」というのが普通でしょうか。なぜそんな名前が付いたのかと言いますと、明治時代前半に明治天皇が各地を巡行するわけですが、新しい世だというので、要するに天皇の威厳を示すために全国をまわった時に石川県で神社に祀ってあったこの石器を天皇に献上し、皇室の御物になったということで、それから御物石器という名前になったのです。

何か名前を付けなければならないからこういう名前を付けたのでしょうかけれど、これでは石器の用途がなんだか全然分からないんです。非常にあいまいな名前が付いており、こういうのは困るんですが、他のものも、もっと困るものもあります(笑)。

これは<sup>どつこいし</sup>独鈷石とか独鈷状石製品という名前です。これは仏具の独鈷に形が似ているからそういう名



前が付いていまして、解釈として、これはハンマー的なもの、ここと両方に頭がある両頭石斧の一種なんて言い方もされます。これは綺麗なものですけれども、もっと形の崩れたものもあります。

それから、こっちはもっと分からないものですが、<sup>よとじがた</sup>琴柱形石製品です。琴柱とは琴を弾くときの糸を張るものです。古墳時代の遺物ですが、面白い形というか変わった形の石製品です。

これも青竜刀形石器という困った名前です。縄紋時代の中期くらいの北日本に多く見られるものですが、非常に大型な石器です。本日お出での皆様は、青竜刀形の青竜刀というのは、大体ご承知いただけると思いますが、学生には説明できなくて、昔の中国の海賊たちが持っていたと言っても、ピンとこない人がたくさんいましたが、それに形が似ているというので青竜刀形石器と言います。

これも何でそうしたのか分からないのですが、非常に大型の石器で、しかもこういうところが刃のように見えますけれども、どうもそうではありません。

右のほうは<sup>せきかん</sup>石冠、冠みたいに見えるので石冠と言います。これは北陸地方を中心として縄紋時代の後晩期あたりに良く見られるものです。

こういったような石器が『雲根志』などに載せられていたものでした。

その他の研究といったところでは、シーボルトを挙げておかないといけません。シーボルトは、江戸時代の文政6年に来日しました。オランダの医者ということで来日しましたが、彼自身はドイツ人です。来日後非常に多くの弟子を持ち、その弟子たちからいろいろ情報を集めて、ドイツ語で大著『日本』を著しています。その中で日本列島の国民とか国家の形とか、神話のこと、歴史のこと、美術・宗教・産業などをこの本の中で紹介しています。

資料の上から、日本にも石器時代があったということを述べていまして、さらにその石器時代人、これはアイヌ人であったのだろうということにも触れています。

シーボルトは、有名なシーボルト事件で国外追放になってしまうのですが、いったん追放されてから、また来日しています。さらに、シーボルトの息子が明治になってからですけれども、来日してまして考古学の面での活躍をしてくれています。

明治初年に来日した<sup>ヘインリッヒ フォン シーボルト</sup>Heinrich von Siebold、その父親が Franz von Siebold で、父親のほうが大シーボルト、息子のほうを小シーボルトとして区別することがあります。

息子は、オーストリアの外交官という形できておりますが、考古学者ということもできるでしょう。明治12年に英文で“Note on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age”を発表しています。父親譲りの日本石器時代人＝アイヌ人説というのをこの中でも補強しています。また、この年『考古説略』という本を日本語に訳したんですが、この『考古説略』で考古学という言葉が非常に普及したと言われていました。『考古説略』の中で考古学の一般というものを述べるとともに、日本考古学の進むべき道のようなことも示しました。

この後お話しする大森貝塚をめぐる、<sup>モーセ</sup>Morseとバチバチやっていたようで、相当、軋轢があったようです。そのことはまた後でふれます。

このシーボルト親子の仕事ですが、大シーボルトは江戸時代の日本人の考古学的知識の蓄積を利用して、大きな本を書き、小シーボルトのほうは、さらにそれを<sup>ふえん</sup>敷衍発展させたと言えると思います。



小シーボルトについては、次回に詳しく取り上げるつもりでおります。

こういう江戸時代の研究の流れがあったのですが、明治時代に入っても、まだ江戸時代的な感覚のもとで研究が進められていたところもあります。

黒川真頼<sup>まより</sup>という幕末から明治にかけての国学者ですが、上野<sup>こうずけ</sup>、群馬県の人ですけれども、明治12年に『上代石器考』という本を著しています。この『上代石器考』の中で、石剣、石鐮<sup>せきかん</sup>、これは車輪石のことですけれども、それから石小刀、石鏃、石斧、石鑿<sup>いしのみ</sup>、石棒、石匙などを説明しており、彼は、こういった石器を兵器・武器とそれから日常用具・日常器材に分類しています。

兵器がここにあげた石剣から石鏃で、それから石斧から石匙までは日常の器具だと分けました。こういったものを考証するにあたって、外国のものと比較するというのもしていきまして、そういう意味では明治の雰囲気もあるわけですが、まだまだ古事記や日本書紀といった古い文献を非常に豊富に使っており、全体的に江戸時代の学風からの脱却というのはなかったと言えるようです。

次に神田孝平<sup>たかひら たんがい</sup>（淡涯）です。この人は天保元年生まれですが、蘭学を学んでいまして、後に兵庫県令、今の兵庫県知事ですね、それから文部小輔、元老院議員、貴族院議員などを歴任し、官僚から出た人で男爵に列せられています。また初代の人類学会会長も務めております。

この神田孝平が明治17年に英文で先ず“Notes on Ancient Stone Implements of Japan”を著し、それを日本語にした『日本太古石器考』を明治19年に著しています。この書物は石版刷りの図版を主としたもので、石鏃、天狗飯匙、雷斧、石剣、石剣頭としていますが、現在の子持ち勾玉、子持ち勾玉というのは、先程の勾玉の背中のところにもっと小さい勾玉の形のもものがくっついているような、そういう石器・石製品です。

それから勾玉、管玉<sup>くだたま</sup>などを説明していきまして、形式、特徴、材質などを述べています。石器の名前を天狗飯匙とか雷斧という言い方をしていることから分かる通り、まだまだ江戸時代以来の伝統に乗ったものと言っていいようです。ちょっと酷評かもしれませんが、西洋趣味を取り入れた日本神代石図譜であるとの評価もされています。

ただ、この時代に、日本人の手で英語で石器の解説書を作ったこと、これは大きな意味があるだろうということですね、外国人であるシーボルトや、次に話すモースなどが活躍している時代に、日本人が自分で英語で書いたところが、意義のあることと言えます。

さて、モースです。Edward Sylvester Morse<sup>エドワード シルベスター モース</sup>については、今、我々はモースと言っていますが、モールズという言い方をする人もおり、明治時代はモールズと言っていたようです。アメリカ合衆国メイン州ポートランドで1838年に生まれています。右側の写真は、東京都品川区の大森貝塚の庭園公園に建てられているモースの銅像です。

これは有名な話で、ご存知の方も多と思いますけれども、モースは、明治10（1877）年横浜に上陸しますが、もうすでに岡蒸気が走っていましたので、横浜から東京へ汽車で向かってくる、その汽車の窓から大森貝塚を見つけるわけです。

モース自身は東京に行って貝の研究をしようということでやって来たんですが、ちょうど東京大学



に招かれまして動物学の講義を始めることとなります。9月16日に動物学の助手松村任三、学生の松浦佐用彦、佐々木忠次郎などを伴って大森貝塚に行きまして、土器、石器、獣骨などを採集しますが、これは言わば予備調査ということなのでしょうか。

その後、10月9日から本格的に発掘を始めます。発掘をするにあたって、地主には50円の謝金を払ったりもしてまして、10月、11月に随時発掘を行っていました。

この間、後に、モースの書いた『日本その日その日』という本の中に、誰かが先に行ってこの大森貝塚を掘ってしまうのではないかと気が気ではなかったということが書いてあります。誰かというのは先程の小シーボルトを意識したのではないかとこのことのようにです。シーボルトも実は大森貝塚の発掘をしています。これは『大森介墟古物編』に出されている絵ですが、手前のところ、これは線路で、まさに岡蒸気が走っておりますが、現在の東海道線、直接的には京浜東北線の線路です。

この線路を作る時に、尾根の縁を切ったところから貝殻が露出したということです。

モースは貝類が専門でしたが、貝類だけではなくて、発掘した結果を土器・石器など、出土する遺物のすべてに細かい注意を払っていました。

この時の発掘の報告が“Shell Mounds of Omori”という題で、東京大学の理学部の紀要として出版しています。モースはこういう報告書を出すということを、当時の東京大学総長加藤弘之に進言してまして、こういう報告書を作って海外の研究機関との交換資料とする、つまり新しいまだまだできたばかりの日本の大学などの研究機関が資料を得るためにどうするか、自分のところの文献と海外の文献とを交換するというで資料を集めていくという方法を教えてくれています。そして図書の充実を図ることを教えてくれているんです。

さらに、モースは、それだけではなくて、大森貝塚から出土した遺物も、アメリカの自然史博物館、それからハーバードのピーボディ・ミュージアムなどに標本として贈っているんです。そして、そこからの交換材料として資料をもらうということをしています。

つまり、日本の、まだまだ資料もない図書もあまりない大学などの研究機関で、資料を充実させていく方策を具体的に教えてくれたということが言えます。

ちなみにモースは帰国した後も、日本の大学への関心を持っていたようです。関東大震災で東京帝国大学の図書館が焼けてしましますが、そのことを知ったモースは、自分の蔵書は全て東京帝国大学に寄贈するということを言い残しました。モースの寄贈した本を実際に見たことがあります。明治時代の学問界における、ある意味での恩人的な存在とって良いと思います。またモースは、英文で報告を出すだけではなくて、最初から日本語版を出版するつもりだったようです。英文のほうは7月に出版されて、和文が12月に出ています。

矢田部良吉、この方は東京大学の教授ですが、口訳して、それを寺内章明という人が筆記するという形で『大森介墟古物編』という名称の書物として出版しています。介墟の介の字はこの「介」で、貝殻ではないんですが、明治の人は鷹揚だったのか、音が同じならそれで良いというのでしょうか。

日本最初の発掘調査報告書ですし、ある意味、報告書の基準的なものを示したと言えるものであり、日本の貝塚研究の上に、非常に大きく寄与したものだと言っていると思います。



その中身ですが、細かく見ていくとキリがないので、取りあえず目次を示しましたが、日本大森貝塚、大森貝塚の概況、それから一般的な特徴ということと、大森貝塚だけの特徴、を書いています。それから土器・装身具・土版・骨角器・石器・動物遺体・食人の風習・扁平脛骨・大森軟体動物相新古の比較という項目に分けて記述されています。

この中の、土版は、また後にお話しますが、そして食人の風習とは結構ショッキングですが、これもまた後で紹介します。

扁平脛骨というのは、脛骨、足の骨ですが、筋肉の付着が大きいので、今の我々よりも、だいぶこのところが尖っているのですけれども、この部分の筋肉の付着面が非常に強いという扁平脛骨が石器時代人の足の骨の特徴だということを指摘しています。

図版解説が全部で18ありまして、1～14に土器、15に土版、それから骨角器、石器、貝があります。ここに示されていた土器は現代の土器の形式名・時期区分に当てはめてみますと、大体、後期から晩期の半ばくらいのところと、それから古墳時代の土師器が見られます。

型式名で見ますと、後期前半の堀之内1式、2式、後期半ばの加曾利式B1式、B2式、B3式、後期後半の曾谷式です。それから新地式、それから安行2式、晩期の安行3a式、3c式という型式のものが見られます。

もちろん、この頃はこういった型式名は見られません。この後だいたい加曾利B1、B2、B3、その辺りの土器、加曾利B2あたりが中心ですが、それらの土器を指して「大森式」という呼び方がされるようになっていきます。

この大森貝塚の報告書は岩波文庫で出されていて、佐原真・近藤義郎という方の共訳が出されています。その前に『考古学研究』という雑誌の「大森貝塚の百年」という号でこのお二人による大森貝塚の報告書が翻訳されて出ています。

ここに示したのは、この時のものです。図版1の図1は「厚さ5～7mm、高さ242mm、口径268mm、上部黒く下部赤みを帯びる。底に網代圧痕。」底に敷物の跡が残っています。あと、細かいものがあるのですが、口縁部のところを上から見た図と、口縁部の断面というようなものが付け加えられています。

それから、図4については、簡単に、「器壁の厚さ5mm、口径150mm、黒色」とだけ書かれています。大森貝塚の典型的なものとして、よく取り上げられるものです。

それから、図版2の図11の土器は、「厚さ6mmで、径190mm」、20cmくらい、「暗い薄茶色、内外黒色、光沢がある。全蒐集品中最も精巧。底の紋様構成は4回のくり返しであるが、口縁部は5つの波状をなしていることが認められる。同じ特徴は、本図版1の土器にもみられる。」とあります。この土器も口縁部が波打っています。波状口縁というんですが、これは世界中の先史時代の土器の中でも日本の縄紋土器だけの特徴です。

大体、口縁部は平らになることが普通なんですけど、口縁部が波状口縁になっているのは、日本列島の縄紋土器だけです。

それから、この写真の土器は図版の19というところにあるのですが、これは厚さ7mm、赤みを帯びた黒色、非常に平滑である。この土器は大森貝塚発見の他のどの土器にも似ていないから、多



分時期が違うものだろう、ちょっと新しいものという指摘がなされたりもしてきました。

これは土版ですが、図ではこういうふう<sup>タブレット</sup>に示されています。これについてはtabletsというふう<sup>タブレット</sup>に書かれていて、モースにとっては未知の遺物だったようです。

これ以外にも、土版（タブレット）で、顔が付いているようなものがあつたり、いくつもあるわけですけれども、これらについての紋様を説明して、共通する性格、つまり土の様子だとか、焼が締まって いるか締まっていないかなど、何よりも共通する特徴としまして、すべて割れている、完全な形のものはないということを指摘しています。これはモースにとって未知の遺物だったということもあって、だいぶ関心を持ったのか、これは何だろうかという推測をしています。

ひとつはスタンプです。それから武器、単なる装身具、顔のようなものが付いたものがあることから家を守る偶像的なもの、あるいは信仰の対象かお守りみたいなもの、計量、ものを測るのにおもりに使ったもの、模様がいろいろ付いているところがあるから貨幣の代わりじゃないか、こんないろんな用途を考えます。

残念ながら、今挙げたことはみんな成り立ちがたいというふうになりまして、モース自身としては3つ可能性を挙げています。ひとつは、的に向けて投げるゲームピースではないかと、割れているということからです。それから、模様が付いている、顔が付いているということもあって、ある意味で権威の象徴というか、それを持っていることで権威を示すしるし印ではないかというもの。それからもう一点、お守りじゃないかと、こういう3つの可能性を挙げています。

類例として、アメリカのシンシナティにも、土ではなく、石で作った岩版があるという紹介をしています。右側には、出土した動物の骨についての説明もされています。

この土版は未だに何だったのか、正確には分かっていないわけです。ただ、顔の付いたものもあるとか、ものによって、穴を開けて紐を通したという可能性もあり、ぶら下げたということも考えられます。いろんなことを考えられるんですが、全部が全部ぶら下げるための装置が付いているわけではありませぬし、大きさもこれとこれとでは、だいぶ大きさが違いますし、未だにはっきりした用途は分かりません。ただ、顔があるようなのを見ると、土偶とかなり近いものではないかということが考えられます。

さて、「食人の風習」ということを言っているわけですが、モースがなぜそのようなことを言ったのかと言いますと、大森貝塚で出土した人骨についての観察からです。人骨がイノシシとかシカとか、そういう獣骨と混在して出てきています。

人骨というのは、普通ですと、埋葬されたものであれば、そのまま出てくるわけです。この形のまま、出てくるわけです。脚が曲がっていたり、手がこんなになつたりしますけれども、手だけがあつちこつちに行ってしまったたりするということは普通ないんです。

私も、だいぶ人骨を掘らせていただきましたけれども、次はこの部分が出てくるだろうと予想して土を取っていくと、大体それが出てきます。だけど、モースが調査した時の大森貝塚ではそうではなく、ばらばらになつて出てくるものがあり、しかも割れていたということです。

これは四肢骨で、割れていたんです。なんで割れていたのかというと、これは骨髓、髓を食べる、または、そういうものを取りやすくするために、小さく割ったのではないか、人為的に割ったのでは



ないかと。

そして、もうひとつ、これは骨自体の観察の結果、骨に傷が付いているところがあることです。筋肉の付着している部分に、ひっかいたり切り刻んだりしたような跡がある骨があるということから、これは骨髓というものを食べるということをしたのではないか、もしかしたら骨と肉とを分けるために、削ったりしているのではないかということです。では、何のために分けるのかというと、食べるためではないかと言うわけです。

実際、アメリカのフロリダにあるセントジョーン貝塚というところで、そういうような人骨が出てきて、それについては食人（カニバリズム）ということが考えられているのだと言うんです。

モースは大森貝塚の人たちが人を食べるということをしていたと言うんですが、日本の歴史家による歴史は、大体1500年くらい前までさかのぼれますが、それから後というのは、人を食べるという風習はなく、認められていません。当然です。だから、モースは日本人そのものが、人を食べるという風習を持っていたということではなく、つまり大森貝塚を残した人というのは、明治時代の日本にいる人たちの前に住んでいた先住民の遺したものである。しかもその先住民というのはアイヌではない。アイヌではそういう食人の習慣はありませんから、そのアイヌより以前に日本に住んでいた人たちが、こういう習慣を持っていた、という解釈を示したわけです。

これをモースは自分の考えとしてあちこちで講演するわけです。同時にモースという人は、進化論に基づく動物の進化というものを講演しています。これを聞いて、とんでもない、そんなことあるはずがないと思った人もたくさんいます。次回、そのお話は致します。

一方、シーボルトは、先程言いましたように、日本列島の先住民というか、石器時代の人にはアイヌだと言ったんです。当然、石器時代の人にはアイヌの前にいた人たち、プレアイヌだということを唱えたモースは、シーボルトへの対抗心もあつたはずですよ。そういうところからも、プレアイヌ説を示したのではないかとも言われます。

それから、大森軟体動物相新古の比較、これはモースの専門であるところの貝類の観察の記録を残しています。大森貝塚で得られた貝と、それからこの当時の現生種の貝の比較をしました。

大森貝塚で出土した貝、サルボウ、アカガイ、サルボウとアカガイは良く似た縦縞のある貝ですね。ハイガイ、オキシジミ、アサリ、カガミガイ、シオフキ、ハマグリ、オオノガイ、バイ、レイシ、ツメタガイ、スガイ、こういった貝について細かく数値を上げて比較しました。

そして、大森付近の江戸湾、今の東京湾ですが、それから江ノ島付近、北海道の小樽、函館、この仙台湾、新潟、長崎の資料も採集して、現在、大森の海岸にはあるけれども、貝塚では発見できなかった貝などを挙げています。

ここでの結論として、大森貝塚を形成してから後、江戸湾（東京湾）の軟体動物、つまり貝類には著しい変化が生じており、種類が変わってきているとしています。どういうことかということ、土地が隆起して海が浅くなったことが言えますし、またハイガイという現在、南のほうの海で採れるような貝がこの貝塚から出土しているということは、大森貝塚が形成された当時というのは、今より暖かかったということを示すとしています。

だから、単に出土した遺物がどうだったということだけではなく、その当時の生活のあり方から気候面、地形といったものまで言及しており、単に事実の記載だけではないということが、“Shell Mounds



of Omori” , 『大森介壺古物篇』に示されたものだと言えます。

このモースの研究がどうなっているのか、影響とか、先程の絵にあったものはどこなのかということは、この次にお話しします。

現在、大森貝塚というものは、大森貝壺と大森貝塚の二か所に、縦長の石碑と横長の石碑とが建っていますが、一体どっちが本当なんだろうということにも触れていこうと思います。

今日、用意したお話は以上でございます。

司会：次回以降、大森貝塚については詳しい話があるということです。楽しみにしてください。

今年の『館長講座』は、去年よりも5回増えて15回になります。来月（7月）からは基本的に、月2回の開催になりますので、よろしくお願ひします。

今日は、どうもありがとうございました。